福井大学国際地域学部　2025年　課題探求プロジェクト　要旨

2年 C班　城野咲羅・吉田美羽

学生発 国際支援プロジェクト

～未来を変える小さな力～

研究テーマについて

～学生団体HomelyKitchen～

［内容］
世界の文化や課題、魅力などを多くの方々にお伝えし、国際支援を推進する活動

［団体設立の理由］
福井県内でも気軽に国際に触れる機会を増やす
多くの人に国際支援を身近に感じてもらう

［由来］
家庭のように暖かく身近に世界を感じてもらう
料理を通じて国際に興味を持ってもらう

- イベントワークショップ
  世界の料理や文化を体験できる機会を提供する。難しい知識を必要とせず、楽しみながら国際について学べることが特徴であり、国や文化の違いに興味を持つきっかけづくりを目的としている。
- 募金活動
  ルワンダの団体の「kiseki」に募金する。
  「kiseki」は、ルワンダにおいてシングルマザーをはじめとした地域のお母さんの自立支援を行うとともに、栄養失調やネグレクトに苦しんでいる子どもたちを支援している団体である。
- SNS発信
  Instagramを用いて、各国の基本的な情報や文化の魅力について投稿している。投稿で様々な国の情報を発信。誰でも分かりやすいように写真やイラストを使って説明している。

調査活動の結果

～Instagram～

約2週間に1回のペースで各国に関する情報発信を行った。投稿内容は、人口・場所・面積・公用語・宗教といった基本情報に加え、食文化やその国が抱える課題、偉人などを取り上げ、その国を詳しく知ることができる構成とした。写真やイラストを活用することで、誰でも分かりやすく、親しみやすい投稿を心がけた。また、投稿内容をもとにした簡単なクイズをストーリーに掲載し、見るだけでなく参加・反応してもらえる工夫を行った。フォロワーは、イベントや交流会を通して直接活動を知ってもらうことで増加した。今後は、実際に外国を訪れた経験のある方から話を聞き、その体験をもとに、よりリアルで深い情報を発信していきたいと考えている。

～イベント～

まず、岡山と福井（あわら）で計2回のイベントに参加した。これらのイベントでは、ルワンダやカンボジアなどのローカルフードを作り、販売・試食を行った。いずれのイベントにおいても用意した料理は完売し、多くの来場者にローカルフードを味わってもらうことができた。一方で、いずれも初めての出店であったため、必要な人員配置や当日の運営体制が十分に整っておらず、提供に時間がかかるなどの課題が見られた。
また、エルパにおいて団体として初めて主催するイベントを開催した。エルパでは、文化体験ワークショップとしてアフリカのブレスレット制作や民族楽器の制作を行った。2日間で30～40組程度の参加があり、多くの来場者にイベント自体を楽しんでもらうことができた。しかし、体験に参加者の関心が集中したことで、展示パネルを十分に見てもらうことができず、文化的背景や深い内容まで伝えきれなかった点が課題として残った。

～生協コラボ～

大学の生協とコラボして募金とアフリカフードの販売を行った。
募金の際は文京キャンパスおよび松岡キャンパスの両方で行い、食堂と購買をあわせた計6か所に2週間にわたって募金箱を設置した。また、SOSEN部の方と募金の声掛けも行った。その結果、計12,697円の募金が集まり、これは支援先の子どもたちの給食およそ100食分に相当する金額となった。一方で、募金先や支援内容を視覚的に伝える説明が不十分で、意義が伝わりきらなかった点が課題として残った。
アフリカフードの販売の際は文京キャンパスにおいてローカルフードであるマンダジの販売を行った。調理場に入れない制約がある中で、事前にSOSEN部の方レシピ共有や試作を重ね、完成度を高めた。その結果、当日は70セットを完売し、学内で異文化の食に触れる機会を提供できた。一方で、文化的背景の説明が不十分で食品販売にとどまった点や、販売数が限られていた点が課題である。

～考察と提案～

これまで私たちは、「食」や「体験」を軸に、ローカルフード販売や文化体験イベント、SNS発信を通して、世界各国の文化や社会課題を身近に伝えてきた。料理の完売や参加者の反応から、体験型の取り組みは関心を引く有効な手段であると分かった。一方で、運営に注力するあまり国際支援について学ぶ時間が不足していた。だから来年度からは、国際支援関係者との対話や交流会を積極的に設け、現場の声を学ぶ機会を増やす。また、体験と文化理解を結びつける説明やクイズの導入、SNS発信の強化を図り、学びと発信を両立させた活動を目指す。今後の活動としては4月にハピテラスでイベントを開催予定で、イベント準備を進めている。